

～気候変動を意識したコンパクトで丈夫な稲づくり～ 適正穂肥と飽水管理の徹底で後期栄養確保！

1. 生育診断に基づく適期適量の穂肥施用

- ア 1回目穂肥は、穂数や籾数確保のために施用する。
- イ 2回目穂肥は、登熟向上に効果があるため、確実に施用する。
- ウ 出穂期以降に断続的な高温が予想される場合は、追加穂肥を施用する。

◎必ず幼穂長と生育状況を確認して、時期と量を決定する。

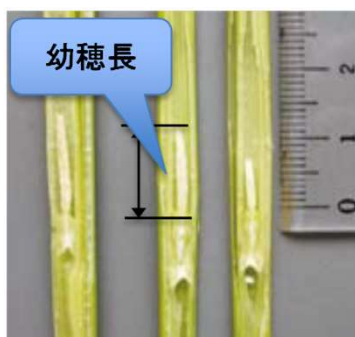


表1 出穂前日数と幼穂長

出穂前日数 (日)	幼穂長 (cm)
24	0.1
20	0.2～0.4
18	0.5～1.0
12	4～6
10	8～11

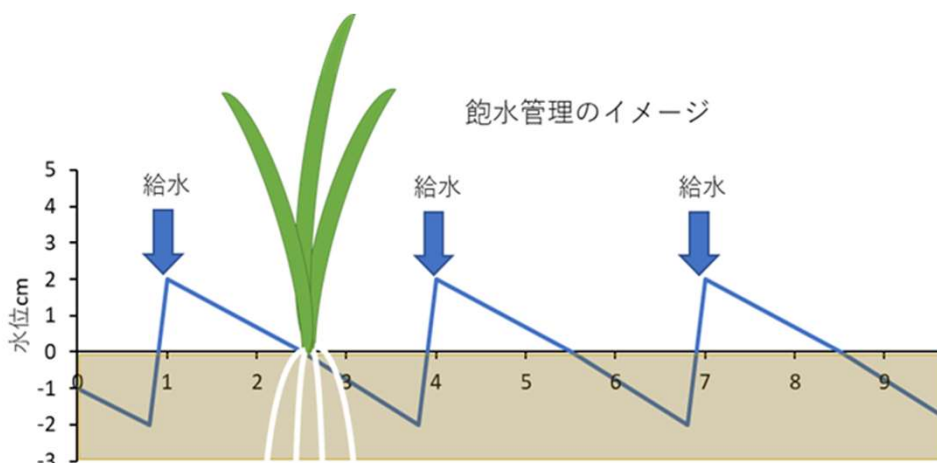
※平均的な株の最も長い茎から2本を用いて測定する

穂肥の施用めやすは、
以降のページを
参考に！



2. 飽水管理の継続による根の活力維持

中干し直後は、浅水の間断かん水を実施し、徐々に飽水管理に移行し、出穂期25日後までは飽水管理を徹底する。



溝や足跡に水がなくなる
前にかん水する。

3. 発生実態を把握し、適期病害虫防除

- ア コシヒカリBL以外の品種は、葉いもちを発見したら、直ちに防除する。
- イ カメムシの密度を低く抑えるため、雑草種子が結実しない間隔(3～4週間)で定期的に畦畔や農道の草刈りを徹底する(ただし、水稻の出穂直前の草刈りはしない)。

ここがポイント!!

- 1 生育診断に基づく適期適量の穂肥施用
- 2 飽水管理の継続による根の活力維持
- 3 発生実態を把握し、適期病害虫防除

1 穂肥施用時期の確認方法

(1) 幼穂長の測定による診断

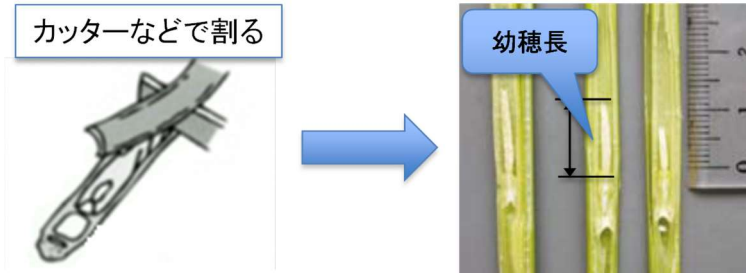
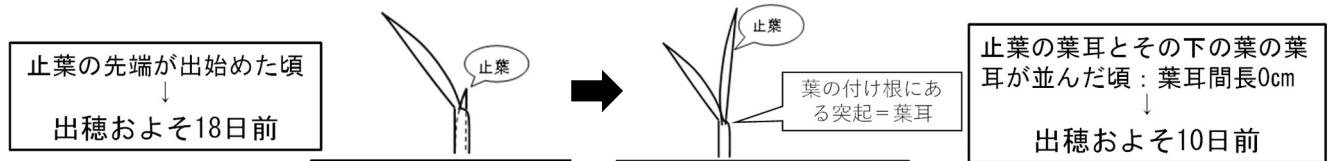


表1 出穂前日数と幼穂長

出穂前日数 (日)	幼穂長 (cm)
24	0.1
20	0.2~0.4
18	0.5~1.0
12	4~6
10	8~11

※平均的な株の最も長い茎から2本を用いて測定する。数株調査し、総合的に判断する。

(2) 葉の出方による診断



2 穂肥施用時のポイント

1 回目穂肥は、穂数や粒数確保による収量向上、2 回目穂肥は登熟向上に効果がある。倒伏や粒数過剰を防ぎ、後期栄養を確保するため、生育診断に基づいて施用する。一発基肥施肥体系の場合、分肥体系の穂肥散布時期に飽水管理を徹底し、土壌中の水分を保持する。

(1) 早生品種

- ・ 1 回目は、各品種の適期に遅れずに施用する。
- ・ 2 回目は、1 回目穂肥の概ね 10 日後に施用する。
- ・ 一発基肥施肥で、葉色の退色が著しく、出穂期に各品種の葉色値のめやすを下回ることが予想される場合は、追肥を検討する。

(2) コシヒカリ

- ・ 1 回目穂肥は、表 2 を参考に施肥量・施肥時期を調整する。

表 2 出穂期 18 日前の稲姿と生育診断のめやす

診断項目		基準値	診断のめやす
草丈 (cm)		75	草丈長い→施肥量を減らす
葉色値	SPAD	32~33 程度	葉色濃い→施肥時期を遅らせる
	葉色板	4.2 程度	草丈長く葉色濃い→遅め控えめまたは施用しない

- ・ 2 回目穂肥は確実に施用する。1 回目穂肥が出穂期 18 日前より遅れた場合は、1 回目施用日の 7 日後をめやすに施用する。
- ・ 出穂期以降に継続的な高温が予想される場合は、表 3 を参考に追加穂肥を検討する。

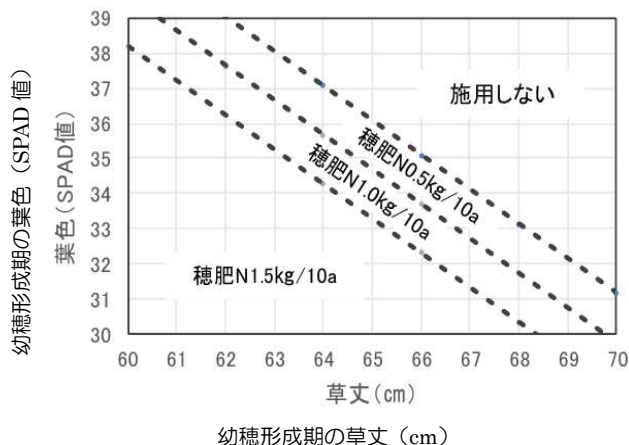
表3 コシヒカリの追加穂肥のめやす

栽培体系		判断時期・葉色(SPAD値)のめやす	施肥時期・施肥窒素量のめやす	用いる肥料
分 施	一般栽培 (化学肥料体系)	出穂期3日前・ 葉色 31 以下	出穂期3日前・ 1 kg/10a	化学肥料
	特別栽培 (減化学肥料栽培)	出穂期6日前・ 葉色 33 以下	出穂期3日前・ 1 kg/10a	有機 50%肥料
出穂期6～3日前・ 1 kg/10a			有機 100%肥料	
一 発 基 肥	一般栽培 (化学肥料体系)	出穂期までの葉色 32 ～33 を下回ると予想 されるとき	出穂期 10 日前・ 1 kg/10a	化学肥料
	特別栽培 (減化学肥料栽培)	出穂期 10 日前頃・ 葉色 30 以下	出穂期 10～5 日前・ 2kg/10a	有機 100%肥料

※特別栽培農産物は令和6年度より地域慣行栽培基準を改正しました。

(3) 新之助

- 分施体系の場合、1回目は出穂期 21～18 日前、2回目は出穂期 12～10 日前に施用する。量はそれぞれ図1及び表4を参考に、窒素成分で 0.5～1.5kg/10a の範囲で調整する。



幼穂形成期の草丈・葉色 (SPAD 値) から施用のめやすを判断できます

図1 新之助の1回目穂肥のめやす

表4 新之助の2回目穂肥のめやす

穂肥2回目施用時の葉色 (SPAD 値)	32.0 未満	32.0～34.5 未満	34.5～37.0 未満	37.0 以上
施肥窒素量 (kg/10a)	1.5	1.0	0.5	施用しない

- 登熟期間の継続的な高温が予想される場合は、整粒歩合の低下を防止するため、表5を参考に追肥も検討する。

表5 新之助の追加穂肥のめやす

用いる肥料	判断時期・葉色 (SPAD 値) のめやす	最大施用窒素量
化学肥料	出穂期3日前・	1 kg/10a
有機 100%肥料	葉色 34 未満	2kg/10a

3 今後の水管理

集落や地域で話し合い、限りある用水を有効に活用できるように工夫する。

- (1) 後期栄養を確保するため、出穂期 25 日後（収穫の 2 週間前）まで飽水管理を継続する。
- (2) 穂肥施用時は、施用ムラをなくし、窒素の吸収を高めるため湛水管理とする。
- (3) 異常高温やフェーンとなる場合は、速やかに湛水して稲体の障害の発生を防ぐ。ただし、長期間にわたる湛水は避け、ほ場の水温上昇を抑えるため可能な限りこまめな水管理を行う。
- (4) 登熟期間が高温で経過する場合、出穂期 30 日後までかん水する。また、地域の通水終期に湛水するなど、できる限り遅くまで土壌水分を保持する。
- (5) 暗渠栓は、最終落水時に開けて、収穫時の地耐力を確保する。

4 病虫害防除

地域の発生予察情報を活用しながら、発生に応じた適切な防除を行う。

- (1) いもち病
 - ・わたぼうし等、いもち病の発生しやすい品種や、転作後等で葉色が濃いほ場などは、粒剤による穂いもちの予防的防除を行う。
 - ・コシヒカリ BL 以外の品種は、葉いもちを発見したら、粉剤または液剤で直ちに防除する。
 - ・葉いもちが上位葉で見られるほ場では、穂いもちの追加防除を粉剤または液剤で実施する。
 - ・新之助の穂いもち防除は、水面施用粒剤または粉剤・液剤等を用いた予防的防除を原則として行う。出穂前に上位葉の病斑が容易に見つけられる場合、穂いもちの追加防除を行う。
- (2) 紋枯病
 - ・早生品種、分けつの多い品種、前年に多発生したほ場で発生しやすいため、6 月下旬頃からほ場をよく観察する。
 - ・粒剤は、病斑が上位の葉鞘へ進んだ場合効果が劣るため、薬剤の散布適期から遅れないように防除する。
 - ・粉剤・液剤は、株元の葉鞘に薬剤が届くように落水して散布する。
- (3) 墨黒穂病
 - ・わたぼうし、および前年に多発生したほ場で発生しやすいため予防的防除を行う。
 - ・汚損玄米の増加を防ぐため、発病したほ場の籾は無発病ほ場の籾と別に収穫、乾燥、調製する。
- (4) ごま葉枯病
 - ・毎年多発するほ場は、予防的防除を行う。
 - ・土壌条件や栄養条件により発病が大きく左右されるため、適切な穂肥施用による後期栄養の確保と根腐れを起こさない水管理を実践する。また、鉄やマンガンを含む資材による土づくりを行う。
- (5) 斑点米カメムシ類
 - ・雑草の種子が結実しない間隔（3～4 週間）で農道や畦畔の除草を行い、カメムシ類の密度を低く抑えるとともに、イネの穂揃い期に防除を行う。
 - ・地域の一斉草刈りは、6 月中～下旬と 7 月中～下旬の 2 回行う。ただし、カメムシ類を水田内へ追い込むことになるため水稻の出穂直前の草刈りはしない。